令和８年２月12日

世田谷区立笹原小学校

校長　　吉田　健二様

区立笹原小学校学校関係者評価委員会

委員長　　黒住 早紀子

令和７年度学校関係者評価委員会報告書

１．はじめに

令和7年度世田谷区立笹原小学校学校関係者評価委員会は、世田谷区教育委員会作成「世田谷区立学校学校評価システム」に基づき、本校の取組の成果について評価し、ここに報告する。

本報告書作成に用いた資料は次の通りである。

・児童アンケート（対象は５・６年生）
・保護者アンケート
・地域の方々アンケート
・学校評価（自己評価）
・教職員との意見交換
・学校公開期間中の授業見学
・学校行事の見学
・委員が学校を訪問した際の非公式な教員との会話と授業見学

今年度の全体回答率は、児童は80％（昨年度88％）、保護者の全体回答率は64％（昨年度69％）で、昨年度と比して回答率が減少した。それに対し、地域の方々の回答率は64％で、昨年度の回答率（46％）から大きく上昇した。

適正な調査のためには、回答率は重要である。昨年度のアンケート回収期間中には、学校側が対象者に送信するメールの文面中に毎回の回収率（回収数/母数）も載せる工夫をしていた。このような仕掛けは全体の回答動向を客観的に、かつ回答者にとっては自身の行動が全体に与える影響を視覚的に確認できる点で、効果的な工夫と言える。昨年度はこの取り組みが全体の回答率上昇に功を奏したため、次年度の実施も検討するとよいかもしれない。地域の方々についても、回答率上昇の要因が思い当たるならば、引き続きその工夫を継続するとよいだろう。

２．重点目標について

今年度の初めに学校長が設定した令和７年度の重点目標は以下の3つである。

Ⅰ　学ぶことを楽しみ、主体的に学び続ける子どもの育成

Ⅱ　人権意識（やさしい心、思いやりの心、多様性を尊重できる心）をもつ子どもの育成
Ⅲ　心身ともに健康で、目標に向けて粘り強く努力できる子どもの育成

重点目標がどの程度達成できたかを確かめるため、学校関係者評価委員会は、児童アンケートと保護者アンケートと地域の方々アンケートに、学校独自の評価項目を作成して調査を実施してきた。今年度は、世田谷区共通項目に変更があった。それに伴い学校独自の評価項目についても見直しをする必要が生じたが、経年変化を見るためにも基本的には昨年度の項目を踏襲し、一部項目についてのみ実態に伴う見直し（項目内容の軽微な修正や削除）を行った。

結果は、表1-1～1-3の通りである。表内に記した数値は、回答のうち「とても思う（A）」と「思う（B）」の回答数の合計（%）である（以下「肯定的回答率」）。

1）重点項目Ⅰ「学ぶことを楽しみ、主体的に学び続ける子どもの育成」について

以下の表1-1は、アンケート全項目からの重点項目Ⅰに関する内容をピックアップし、その肯定的回答の結果をまとめたものである。

表1-1　3つの重点目標に関する評価項目の結果（重点項目Ⅰ）

Ⅰ　学ぶことを楽しみ、主体的に学び続ける子どもの育成	肯定的回答率の合計(%)	
評価項目	令和6年度 (5年/6年)	**令和7年度 (5年/6年)**
（児童アンケート）		
・学ぶことが楽しい（共通項目）	82.2 (80.1/85.0)	**76.0 (82.4/70.9)**
・先生は、課題（めあて）について、自分で考えたり友達と考えたりする時間を授業の中でとっている。	80.7	**89.9**
・授業では、考えたことを話し合ったり発表しあったりする機会がある。	86.5	**93.0**
・私には努力できることがある。	86.4	**93.1**
・私は、よく考えて判断し、行動することができる。	82.1	**80.6**
（保護者アンケート）		
・本校は、子どもが考えることや、課題を解決することを大切にした授業を行っている。	66.3	**71.5**
・本校は、子どもが考えたことを話し合ったり発表したりする機会がある。	77.8	**79.1**
・子どもたちは、努力できることがある。	85.6	**83.5**
・子どもたちは、よく考えて判断し、行動することができる。	60.1	**71.5**

重点項目Ⅰに関する項目関しては、「努力できることがある」という項目への回答について、児童・保護者ともに肯定的な回答を維持していることに対し、児童の「学ぶことが楽しい」という項目については、肯定的回答率の減少が目立つ。この要因を検討するために、次の表1-1-1では、今年度と昨年度の

回答内訳を比較した。

表1-1-1　項目「学ぶことが楽しい」の年度・学年比較（%）

		A.とても思う	B.思う	C.あまり思わない	D.思わない	E.わからない
R6	5年	18.8	61.3	13.8	3.8	2.5
	6年	31.7	53.3	8.3	6.7	0.0
	全体	24.3	57.9	11.4	5.0	1.4
R7	5年	29.8	52.6	17.5	0.0	0.0
	6年	29.2	41.7	15.3	9.7	4.2
	全体	29.5	46.5	16.3	5.4	2.3

昨年度（R6）の5年生のデータと今年度（R7）の現6年生のデータを比較すると、「学ぶことが楽しい」という項目の「A.とても思う」という回答率は増加（18.8→29.2）、「B.思う」は減少（61.3→41.7）、「C.あまり思わない」は軽微な増加（13.8→15.3）、「D.思わない」は増加（3.8→9.7）、「C.わからない」は軽微な増加（2.5→4.2）というように、回答が分散する形で変化していることがわかった。つまり、現6年生においては、昨年度は「学ぶことが楽しい」とある程度思っていた児童らが、この1年間を経て、より楽しいと感じるようになった者とそうは思えなくなってしまった者に移行し、回答が二極化したと考えられる。この二極化のポジティブ層（学ぶことの楽しみが良い方向に強化された層）は良いとして、ネガティブ層（学ぶことの楽しみがわからないまま又はより感じられなくなった層）にいる子どもたち注目すると、彼らに一体何が起こったのだろうか。5年生から6年生になることで学ぶことの深さや難しさを知ったからかもしれない、思春期を迎え自分自身について悩むことが増えてきたからかもしれない、純粋に学ぶことが楽しくなくなったのかもしれない等々、複数の仮説が立てられる。かのソクラテスが言う「無知の知」のように、己が知らないことを自覚することから新たな知の追求が始まる場合もあるだろうが、児童が学ぶことの意義を見出せない状態であるならば教師の支援や指導の工夫が求められていると言えるだろう。

今年度（R7）の現5年生の回答を見ると、「A.とても思う」（29.8）、「B.思う」（52.6）、「C.あまり思わない」（17.5）の3項目で回答の100%を占め、「D.思わない」と「E. わからない」の回答が0である点が特徴的である。昨年度の6年生も「E.わからない」は0%であった。児童全体、中でも特に現6年生の「学ぶことが楽しい」項目の肯定的回答率の減少については年度特有のものである可能性も否定できないため、学校は学ぶことの楽しみを児童に伝える取り組みを続けつつも、来年度以降も慎重な検討・評価を続ける必要があるだろう。

現代の教育として注目されている話し合いや学び合いに関する項目の肯定的評価は、児童・保護者ともに高い肯定的回答率がある一方で、実際に判断し行動することができているか問う項目になると、保護者の肯定的回答率は上昇傾向があるが児童の肯定的回答率は減少している。つまり、先生の指導下にある授業内では、考えるということを意識出来ているが、実際に判断し行動するという段階になると児童は自信を持った回答ができないようである。

考えるという行為には、たくさんの側面がある。例えば、私たちは、他者のアイディアを聞きながら自分の考えを深めていく際にはブレインストーミングのような拡散的思考をするが、考えたことをもとに判断をするような場面では収束的思考をする。多様性を尊重することに重きが置かれる現代、日常的な問題解決に当たっては、唯一の正解を求める思考よりも、話し合いを通した意思決定や共通理解を図

る対話など、常に自分の判断を疑う姿勢を持つ訓練が重要視されつつあるようにも感じる。教育の不易と流行ということばもあるように、教育方法は時代の変化を受けやすいものである。言うが易く行うが難しではあるが、時代に合った教育方法の流行を取り入れつつも、新しい方法に過度に振りまわされることなく、その方法を通して子どもたちに教えたいことや教えるべきことは一体何なのかを逃さずに、子どもの学びを保障していくことが、教員に求められているともいえるだろう。

2）重点項目Ⅱ「人権意識（やさしい心、思いやりの心、多様性を尊重できる心）をもつ子どもの育成」について

次の表1-2は、アンケート全項目からの重点項目Ⅱに関する内容をピックアップし、その肯定的回答の結果をまとめたものである。

表1-2 重点目標に関する評価項目の結果（重点項目Ⅱ）

Ⅱ人権意識（やさしい心、思いやりの心、多様性を尊重できる心）をもつ子どもの育成	肯定的回答率の合計(%)	
評価項目	令和6年度	**令和7年度**
（児童アンケート）		
・私は、自分のよさや友達のよさを見つけることができる。	85.7	**88.3**
・笹の子班活動を通して、上学年や下学年の子どもたちと仲よく楽しく活動することができている。	79.3	**78.3**
（保護者アンケート）		
・本校には、多様性を認め合う雰囲気がある。	55.8	**65.0**
・笹の子班活動は、子どもたちにとって有意義な活動であると思う。	80.1	**78.1**

重点項目Ⅱに関する項目では、児童アンケートの「私は、自分のよさや友達のよさを見つけることができる」と保護者アンケートの「本校には、多様性を認め合う雰囲気がある」という項目で、肯定的な回答率に上昇があることから、本校の多様性を尊重できる心の育成が評価されていると見て取ることができる。保護者の肯定的回答率は昨年度から約10ポイント（55.8→65.0）も上昇した。

この要因として、社会全体での多様性の理解が広がっていることも挙げられるだろうが、本校特有の要因も考えられる。

本校には、すまいるルームという特別支援教室や目の教室という通級指導教室があり、障害のある児童が多く在籍している。海外から一時帰国した児童の体験入学も、毎年かなりの数を受け入れている。また、笹の子班活動という本校独自の取り組みでは、異年齢の児童同士が関わり、共に何かを達成する活動が実施されている。学校組織としての支援体制の面では、通常学級を担当する教員以外に、特別支援教室や目の教室を担当する教員はもちろん、区の制度としての特別支援教室専門員やインクルーシブ教育支援員、エデュケーションアシスタント、学校独自の学習支援ボランティアの方も複数人活躍している。このように、多様なニーズのある子どもたちを多くの大人の目と手で支援できる環境があることも本校の強みである。また、本校の職員室は、通常学級の教員も特別支援教室の教員もひとつの職員室内に座席を持っており、若手教員とベテラン教員が混じるように配置されている。特別なニーズのある

児童を受け入れる際、一般的には担任の負担が大きくなりやすいものであるが、このような学校側の環境的工夫により、教員同士が雑談の中で児童の支援や指導の相談がしやすい雰囲気が作られている。

多様性の社会では、さまざまな価値観を持つ人が集まって同じ場所で生きており、自分の当たり前は必ずしも他者の当たり前と同じにはならない。そのため、私たちはわからないことを前提にコミュニケーションをとっていかねばならない。最近の研究では、自己統制感の低さと、自己と類似性した他者や同質集団への選好には有意な相関があるという結果が報告されている。つまり、人が「私にはどうにもできない」と自分のコントロールが及ばない状態に直面した時に、無意識に自分と似た人や集団に引き寄せられる傾向が強まることが明らかにされており、それは時に私たちが多様な考え方に触れる機会を制限することもあるという。

児童だけではなく教員も、わからないことがあれば「わからない」と素直に口に出せたり、気軽に相談できる環境が守られているなど、自己統制感を失うことなく直面した問題と向き合っていける環境の確保が、多様性を尊重し合う社会を維持するにおいて重要であると言えるかもしれない。

3）重点項目Ⅲ「心身ともに健康で、目標に向けて粘り強く努力できる子どもの育成」について

重点項目Ⅲについては、前半の「心身ともに健康で」という面と、後半の「目標に向けて粘り強く努力できる」という面の２つにわけ、以下では検討を進めることとする。

表1-3-1　３つの重点目標に関する評価項目の結果（重点項目Ⅲ）

Ⅲ　心身ともに健康で、目標に向けて粘り強く努力できる子どもの育成	肯定的回答率の合計(%)	
評価項目	令和6年度	**令和7年度**
（児童アンケート） ・私は、うがい・手洗いなど健康に気を付けている。	85.0	**73.6**
（保護者アンケート） ・本校の子どもたちは、感染症の予防等健康に気を付けている。	47.7	**58.2**

まず、重点項目Ⅲの前半部である健康に関する面について、手洗いやうがいの意識に関する児童の肯定的回答率に低下がみられた一方で、保護者の肯定的回答率は上昇した。今年度はインフルエンザの流行拡大で、多くの学校でやむなく学級閉鎖となる時期もあったようだが、本校の学級閉鎖は1学級にとどまった。この点も保護者からの評価につながっているかもしれない。

うがい・手洗いについては、委員から、児童が蛇口の栓を閉め忘れ、水道の水が流れっぱなしになっている状況が繰り返し観察されたとの情報提供があった。コロナ禍以降、社会では非接触型の設備（自動水栓等）が広がったため、それに慣れた子どもたちのアクションスリップによるものと思われる。

自動水栓は、感染対策に留まらず節水効果もあるとして、不特定多数の人が利用する場での導入が進んでいる。設置にはそれなりの費用がかかるためすぐに整備とはいかないだろうが、いずれ学校現場にも自動水栓が当たり前となる日が来るだろう。それまでは、これまで同様に、学校環境設備を大切に使う、有限な資源を大事にすると言った観点からの指導が求められるだろう。

表1-3-2　３つの重点目標に関する評価項目の結果（重点項目Ⅲ）

Ⅲ　心身ともに健康で、目標に向けて粘り強く努力できる子どもの育成	肯定的回答率の合計(%)

評価項目	令和5	令和6	**令和7**
（児童アンケート）			
・先生は、課題（めあて）について、自分で考えたり友達と考えたりする時間を授業の中でとっている。	92.4	80.7	**89.9**
・自分の生き方や将来のことについて、考える授業がある。	52.2	64.3	**66.7**
・目標をもち、その実現にむけて努力している。	66.7	80.0	**72.9**
（保護者アンケート）			
・本校の教員は、子どもに目標をもたせ、その実現のために支援している	51.6	49.3	**54.4**
・本校は、子どもの生き方や将来のことについて考える授業をしている。	34.4	44.5	**44.5**

次に、重点項目Ⅲの後半部「目標について粘り強く取り組む」については、児童アンケートの「先生は、課題（めあて）について自分で考えたり友達と考えたりする」、「自分の生き方や将来について、考える時間がある」の項目のどちらとも昨年度から肯定的回答率の上昇がみられたが、前者より後者の方が相対的に低い結果となった。

この結果を考察すると、児童は、授業中の学習のめあてなどの短期的目標を意識し努力することはできるが、将来のことなどの長期的目標に向けて考えることには課題があると言えるのではないだろうか。目標設定は、すぐでも達成可能な現実的で具体的な水準から、将来の夢のように理想的で抽象的な水準まで、グラデーションのように考えることができるが、児童にとっては、生き方や将来といった時間的に先にある目標はイメージがつきにくいかもしれない。

人間には進捗が見えると達成に向けた努力が加速するという行動パターンがあるいうことが明らかにされている。目標に近づくにつれてモチベーションが高まるこの現象はゴール・グラデーション効果と呼ばれる。目標達成に至るまでの小目標を立てるなど、上手な計画の仕方を身に付けることが、目標にむけて粘り強く努力する力を育むために有効となるかもしれない。

項目を個別に見ていくと、児童アンケートの「目標をもち、その実現にむけて努力している」という項目の肯定的回答は昨年度は約 13 ポイント上昇したが、今年度は 7 ポイント減少した。児童・保護者ともに「自分/子どもの生き方や将来のことについて考える授業がある/をしている」という項目の肯定的回答率も、児童、保護者ともに上昇しており、学校の教育活動として一定の評価がなされているとわかる。

本校では、昨年度は全学年で「わくわくシート」、「のびのびシート」、「ぐんぐんシート」というワークシートが目的別に活用されており、児童に常に目標を考えさせる取り組みを実施している。こういった取り組みが、児童や保護者の肯定的回答率に影響していると言える。

高学年になるとキャリア学習として職業調べが始まる。児童らは、ゲストティーチャーにその職業の特徴を尋ねるような具体的な質問はできても、卒業文集の「20 歳のあなたは何していますか」と言う問いには明確に答えられないことも多い。むしろ低学年の児童の方が、自分がなりたい職業を明確に回答できることすらある（お花屋さん、警察官等）。子どもたちの将来の夢は、低学年から高学年になるに従い、憧れから徐々に現実的・具体的な職業にシフトしていくものである。時間感覚も発達し、大人の時間知覚の感覚と近づいてくる。高学年になると現実が見えるようになるがゆえに、目の前の課題や目標はわかりやすくイメージできるが、将来の生き方や目標はイメージしにくのかもしれない。

３．その他の取り組みについて

ここでは、笹原小学校にて取り組まれてきた独自項目について、1)言語活動、2)笹の子班活動、3)よりよい教育活動、4)あいさつの4つの視点から、過去5年間の肯定的回答の推移を見ながら検討していくこととする。

1）言語活動について

言語活動の中でも、読書活動に関する項目の肯定的回答率は、この5年間で徐々に低下し、特に今年度の低下率は著しい。その要因として、今年度のカリキュラム変更が挙げられた。カリキュラム変更により、これまで帯活動として実施してきた朝読書の時間が設定できなくなったそうである。低学年の場合は、カリキュラム上の余裕が多少あり、授業内で本に親しむ習慣を身に付けるための活動を取り入れることも可能であるが、高学年の場合はそれも困難であったとうかがった。

表2-1　「言語活動」に関する評価項目の肯定的回答率の過去5年間の変化

評価項目	令和3	令和4	令和5	令和6	**令和7**
1）言語活動					
・私は、朝読書など読書活動を楽しんでいる。（児童アンケート）	75.2	76.5	64.4	64.3	**44.2**
・本校の子どもたちは、読書活動を楽しみ、読書に親しんでいる。（保護者アンケート）	79.1	67.4	55.4	64.4	**64.0**

現代の読書は紙媒体メインの時代と様相が変わってきているが、紙媒体の本とデジタル画面の本では、紙の方が読解力の成績が良くなるという研究もある。その研究では、物語文ではそれほど差がみられないが、説明文等難しい内容や複雑な状況を正確に理解しようとする場面では、紙媒体の方が優れているとの結果が出ている。特に発達の過程にある児童期では、バランスの良い感覚への刺激や視力への影響の観点からも、読書は基本紙媒体で、デジタルは補助的に使用する方が好ましいという有識者の意見もある。

委員会の意見交換では、過去の教室では、大抵、子どもの机の中にはお気に入りの1冊が入っていて、テストが早く終わった児童は「本を読んでもいいですか」と教員に尋ねるものであったという話題が出た。それが最近は「タブレットを見ていいですか」と言う児童の方が増え、タブレットで何をするかというと、それは必ずしも読書ではないという情報提供もあった。

学校としては、学校図書館の活用や学級文庫の設置、読書習慣など、児童の読書を促す取り組みもしている。また、PTAの協力も得て、地域の図書館からの本の貸し出しやPTA予算で児童が希望する書籍を購入するなど、児童ができるだけ本に触れられる機会を増やす努力を続けている。こういった環境側を整える取り組みも非常に重要であるが、「Noタブレットデイ」（タブレットを開かない代わりに本は許可する日）を設けるなど、より積極的な読書活動の推進を学校全体で実施することも、現代の子どもたちが本に親しむ経験を保障する上で有効かもしれない。

2）笹の子班活動について

笹原小学校で実施されている異年齢縦割り班活動である「笹の子班活動」は、年度により多少の上下はあるものの、5年間を通して高い肯定的回答率を維持している。

表2-2　「笹の子班活動」に関する評価項目の肯定的回答率の過去5年間の変化

評価項目	令和3	令和4	令和5	令和6	**令和7**
2）笹の子班活動					
・笹の子班活動を通して、上学年や下学年の子どもたちと仲よく楽しく活動することができている。（児童アンケート）	79.9	87.4	76.5	79.3	**78.3**
・笹の子班活動は、子どもたちにとって有意義な活動であると思う。（保護者アンケート）	83.6	78.9	80.2	80.1	**78.1**

アンケートの対象となる高学年の児童は、笹の子班活動では低学年をリードするなど運営で重要な役割を持つ。リーダーとなる経験がプレッシャーになることもあるだろうが、多くの児童にとっては人に認められる経験ともなり、教科学習に苦手意識を持つ児童にとってはそれが新たな自分の一面を発見する時間ともなっているようである。

昨年度までは笹の子班活動の集大成である「ささのこまつり」は土曜日に実施されていた。土曜日に学校公開がある場合には、保護者も「ささのこまつり」での児童の様子にその活動の意義を見て取ることができた。しかし、今年度から世田谷区で原則として土曜授業が廃止されたこともあり、保護者は、昨年度までのようには笹の子班活動の様子を見られなくなった。この変化が、保護者アンケートの肯定的回答に影響した可能性もある。本校独自の笹の子班活動の意義について保護者により理解していただくためには、新たな工夫が求められるだろう。

3）よりよい教育活動について

ここの評価項目については、これまで外国語活動、英語、ICT教育等の内容を“新しい教育活動”として検討してきたが、外国語活動・英語の教科化やICT教育の一般化といった社会的変化を受け、今年度からは“よりよい教育活動”として評価することとする。

表2-3　「よりよい教育活動」に関する評価項目の肯定的回答率の過去5年間の変化

評価項目	令和3	令和4	令和5	令和6	**令和7**
3）よりよい教育活動					
（児童アンケート）					
・先生は、黒板の書き方やプリントなどを工夫している。	85.7	88.5	78.8	82.1	**79.9**
・授業では、考えたことを話したり発表しあったりする機会がある。	90.5	95.8	89.4	86.4	**93.0**
・先生は、映像やタブレットを工夫し、分かりやすい授業をしている。	86.4	89.1	81.0	88.6	**89.1**
・私は、家庭で宿題やe-ラーニングでの学習をしている。	71.4	71.1	54.6	61.4	**72.1**
（保護者アンケート）					
・本校は英語や外国語、ICTなどの教育に取り組んでいる。	69.3	58.9	54.1	--	**--**
・本校は、黒板の書き方やプリントなどを工夫している。	60.2	58.3	54.1	54.2	**64.7**
・本校は、子どもが考えたことを話し合ったり発表しあったりする機会がある。	75.7	73.7	74.9	77.8	**93.0**
・本校は、映像やタブレットを工夫し、分かりやすい授業をしている	65.2	58.3	65.0	58.8	**65.8**

注）質問項目は年度により多少異なる。--は実施せず。

GIGAスクール構想の推進により学校で一人一台端末が定着した現在は、導入期の目標であった「いかに児童に授業を届けるか」から「一人一台あるタブレットをいかに活用してどのように効果的な学習活動を行うか」という視点でのICTの活用が求められるようになった。

今回の児童アンケートの結果から、児童は、教師が授業内で実施する工夫（黒板やプリントの工夫、考えたことを話し合ったり発表し合ったりする機会、映像やタブレットを工夫したわかりやすい授業）については概ね肯定的な評価をしている。それに対し、家庭での学習（宿題やeラーニング）の肯定的回答率は低めとはいえ、3年間で毎年10ポイントずつほど上昇している。

保護者アンケートの結果では、学習指導に関する項目について「E.わからない」の回答率が高かった（1～2割）。この要因について検討すると、前述した土曜授業の見直しにより、保護者が学校公開に参加して児童の学習の様子を見る機会が充分に得られなかったことが考えられる。学校としては平日にも学校公開の機会を設けているが、土曜授業と比べれば保護者の参加率は低いことはやむをえない。今後どのように保護者に学校が実施している学習指導の工夫を実感していただくか、もしくは、アンケートの質問項目を見直して、新たな項目で保護者に本校の「よりよい教育活動」を評価していただくことも含め、来年度検討しなおしてもよいだろう。

4）あいさつについて

あいさつに関する項目では、児童の肯定的回答は昨年と比して横ばい（83.5→82.2）であるが、経過を見ると直近3年間で上昇が維持されている。地域の方々の評価結果との乖離は変わらずあるものの、地域の方々の肯定的回答率は上昇している。これは、あいさつ行動が児童に習慣化しつつあり、学校外で地域の方々の目にも留まるようになったと評価できるだろう。

表2-4　「あいさつ」に関する評価項目の肯定的回答率の過去5年間の変化

評価項目	令和5	令和6	**令和7**
4）あいさつ			
・私は、すすんであいさつをしている。（児童アンケート）	63.4	83.5	**82.2**
・本校の子どもたちは、すすんであいさつをしている。（地域の方々アンケート）	52.6	62.9	**65.5**

あいさつは社会での人間関係を円滑にする上で役に立つだけではなく、自分の存在を感じさせる効果ももつ。大人になると、反射的で形式的な挨拶だとしてもそれを他者と交わすことが社会的スキルとして必要にもなるが、子どもにそれを求めることは現代社会では安全的な懸念もある。ただ、誰かから強制させられたあいさつは、あまり意味をなさないものである。子どもから自主的に発せられるときにこそ、本来の意味での挨拶になると考えられる。

本校では、あいさつ週間の実施、標語のポスター掲示、教員側からすすんで児童に「おはよう」の声かけをする等、児童にあいさつの意義を伝えるための日常的な取り組みが実施されている。また、代表委員会では、「言葉について話し合いたい」「何気ない言葉で相手を傷つけることをなくしたい」という児童の提案から、言葉のプロジェクトを実施した。この活動では、劇で言葉の大切さを見せたり、各学級から集めた思いやりの言葉ややさしい言葉を電車の形にして繋げるように表現した掲示物を作成したりするなど、児童から上がった声を形にする活動を行った。掲示物を見ると、あいさつの言葉や、日常の何気ない声掛けの言葉もあげられていたのが、委員としては印象的であった。

これら取り組みはぜひともこのまま継続していただきたい。日頃から気持ち良いあいさつが交わされるような整った環境に置かれた子どもは、あいさつの意義を体感的に理解することだろう。また、反射的にあいさつに応答してしまうような経験も無駄にはならない。あいさつ週間の期間中にあいさつ行動を促され意識的にあいさつをする経験を積み重ねることで、習慣化に導くことも可能であろう。

４．保護者・地域との連携・協働

この項目は昨年度までは世田谷区独自の「キャリア・未来デザイン教育」に関する評価項目として検討されてきたが、今年度は、「保護者・地域との連携・協働」の項目として検討することとする。

表３　保護者・地域との連携・協働に関する質問項目の肯定的回答率

	肯定的回答率の合計(%)		
評価項目	令和5年	令和6	**令和7**
（児童アンケート）			
・区立中学校に関する情報が提供されている。	55.3	49.3	-
・学び舎の中学校に行ったり、中学生が来たりする機会がある。	75.7	60.0	-
（保護者アンケート）			
・本校は、近隣の幼小中学校で構成する「学び舎」による幼稚園・小学校・中学校の連携や交流活動が行われている。	78.4	83.9	**83.2**
・「学び舎」の区立（幼稚園）中学校について情報が提供されている。	63.3	63.4	**59.9**
・私は、学校公開にすすんで参加している。	80.2	77.1	**79.8**
・私は、学校行事、PTAや地域主催の行事などにすすんで協力している。	64.4	61.1	**59.6**
・本校は、地域と連携して「キャリア・未来デザイン教育」の推進をしている。	40.5	45.1	**50.0**
（地域の方々アンケート）			
・本校は、地域と連携して「キャリア・未来デザイン教育」の推進をしている。	63.2	68.6	**69.0**

保護者アンケートの結果に注目すると、近隣の幼小中学校で構成する「学び舎」による連携や交流活動については。7～8 割の肯定的評価が保たれている。それに対し、「キャリア・未来デザイン教育」の推進に関する項目では肯定的回答率が低めで、より詳細に結果を眺めると、「E.わからない」との回答が35.6%であった。

本校では、5 年生と 6 年生を対象としたキャリア教室を毎年実施している。学校運営委員会の協力を得て、地域のネットワークという強みも活かし、警察や消防署、公務員や飲食店員や美容師など、多様な職種のゲストティーチャーを招き、児童らがゲストに「子どものころ好きだった科目は何か」、「なぜその仕事を選んだのか」などを尋ねながら、自分たちがさまざまな職業の人達に支えられていることに気づき、自分はどのように生きたいのかを考える活動になっている。

保護者アンケートも地域の方々アンケートも、経年変化を見れば、徐々に肯定的回答率が上昇していることから、「キャリア・未来デザイン教育」理解されつつあると言える。

キャリア教育というと、世間では職業教育や進路指導などと混同されて捉えられることも少なくない

が、学校教育におけるキャリア教育は、子どもの発達段階や発達課題の達成も踏まえながら、全人的な成長や発達を支援する目的がある。つまり、幼稚園児には幼稚園児に適した、児童には児童に適したキャリア教育があり、彼らが将来社会人や職業人となって自立するに向けた指導や支援を段階的に提供していくことが、教育現場に求められている。今後も、引き続きの学校からの情報提供はもちろん、日頃の教育活動を通して児童の変化を見ていただいたり、「キャリア教育」の広義な意味と役割について説明をしたりすることで、保護者や地域の方々へのキャリア教育の理解・啓発を推し進めていただきたい。

次に、保護者アンケートの「私は、学校公開にすすんで参加している。」の肯定的回答率は多少の変動はありつつも肯定的回答率が維持されているが、「私は、学校行事、PTA や地域主催の行事などにすすんで協力している。」の肯定的回答率は徐々に減少している。

委員が学校行事や学校公開に参加した印象では、保護者の方々の姿は協力的に見えた。委員間の情報交換では、今年度の学芸会では、ある学年の大道具製作で保護者が活躍されたと聞いた。また、子どもに危険が伴う学習や広く手厚い支援が必要とされるような学習（図工の彫刻刀使用、家庭科のミシン等）では、保護者の協力を募ることがあるとの情報提供もあった。

アンケートの回答率という数値には表れていないが、委員が授業や行事を見学させていただいたところでは、本校の保護者は潜在的な学校参加のモチベーションをお持ちであるように感じた。保護者と教員が協力し協働している姿を見せることは、児童への良い刺激にもなるに違いない。もちろん保護者に強いることはできないが、適宜協力を仰ぐことで、これまで築いてきた学校と保護者の連携や協働の体制を保っていけるとよいだろう。

6 総合所見

一昨年度の総合所見から、気になる兆候として年々落ち着きのない児童が増加していることが挙げられている。教室にいられない児童や教室を飛び出す児童の安全管理や、クールダウンできるスペースの設置、当該児童と担任が相談して落ち着いて学習できる場所での学習を許可するなど、学校全体での努力が実り年々落ち着きつつあるが、対応が不要になったとまでは言えない。コロナ禍で子どもたちが適した時期に適した経験を積み重ねて来られなかった影響が残っているとも考えられる。
だが、今年度の児童アンケート結果からは、学校や先生の取り組みを肯定的に評価し信頼していることもうかがえる。

「学校生活は楽しい」(85.3)、「学校行事は楽しい」(92.2)、「学校行事には達成感がある」(86.8)、
「先生は、児童の意欲を大切にしている」(81.4)、「先生たちは、ていねいに指導してくれる」(87.6)、
「先生たちに相談できる（67.4)、「学校のきまりを守らない児童に先生は注意している」(89.4)
「先生に注意されたことは理解できる」(94.7)

例えば、マルトリートメント（不適切な養育）を受けた子どもの回復には、被害を受けてきた期間の倍以上の時間の適切なケアが必要になると言われている。時間はかかるだろうが、今後も根気強い指導と、丁寧なケアを長い目で続けていく必要があるだろう。

本校はもうすぐで創立 70 年を迎えるが、その歴史は地域とともにある。毎年 1 月に開催される「どんど焼き」が笹原小学校で実施されることになった経緯や、現在どのように運営されているかのお話をうかがったところ、地域とのつながりなしには語れないものであることがわかった。本節の筆者は今年度初

めて「どんど焼き」の行事に参加させていただき、その様子を拝見したが、櫓が組まれていく過程も、着火して火が大きく上がる様子も、上がった煙や灰が風で舞う景色も、それに驚きと喜びの声を上げる子どもたちの姿も、拝見した場面一つひとつの余韻は今でもリアリティを持って思い出せる。同じように、将来語られる思い出として児童の記憶に残るものとなるかもしれない。大人たちも良い表情をしていたのが印象的だった。上記のどんど焼きだけではなく、昨年度のポプラの植樹行事も同様で、学校と地域が手を組み、子どもたちを育てるための土壌を維持しているようにも感じた。これは本校の強みである。

伝統は継承されるからこそ伝統になる。しかし、その維持は簡単ではない。地域においては、担い手の高齢化、後継者不足、経済的負担の増加、価値観の多様化による地域伝統への関心の希薄化など、この社会全体や時代の変化ともなう問題にぶつかる。教員を取り巻く社会状況も年々変化し、教員が本来教員としてすべきことに注力できるような制度改革や環境整備が求められている。学校も、「地域に開かれた学校」から「地域と共にある学校」など、そのあり方の改革が求められている。

子どもの学びは、学校教育、家庭教育、社会教育の三本の大柱で支えられている。学校も家庭も地域もそこには“人”がいる。つまり、保護者や家庭の方々、地域の方々、学校を構成する教職員ひとりひとりの手があって、教育は成立する。不確実で予測するのが困難な現代は、VUCA（V: Volatility 変動性、U: Uncertainty 不確実性、C: Complexity 複雑性、A: Ambiguity　曖昧性）とも表現され、変化に対応し社会や人生をよりよいものにするための学びに変えていくとされているが、一朝一夕で起こる変化には、到底一人では太刀打ちできない。グローバル化し多様化が進む今の世の中は、個人の「当たり前」や「普通」といった感覚が通用しないことも多く、他者と共にいるには自分の感覚と他者の感覚との齟齬を認め合いながら、互いを尊重する姿勢が前提となる。日本の学校教育は、義務教育という制度上ではすべての子どもたちが人生において通る道で、すべての子どもたちが自分と異なる他者と付き合い、失敗しながらでも、人と違う自分の強みに気付ける機会を持てる場であるし、他者から尊重されながら他者を尊重することを学べる場である。

きれいごとで理想の机上の空論ではあるが、子どもたちだけではなく、今は大人になってしまった学校の教職員の皆様も保護者や家庭の皆様も、地域の方々ひとりひとりも、すべての子どもたちがそうされるべきであるように、他者から尊重されながら他者を尊重するべきである。子どもそれぞれに強みがあると言うならば、大人それぞれにもあるはずだ。

児童を中心に据えながらも、笹原小学校の教育に関わるすべての大人の方々が協力しながら、それぞれの持つ強みを発揮し生き生きと活躍され、笹原小学校そのものの益々の発展へと繋がることを委員一同願っている。

個人の努力や工夫を支える教育の土台は、教育の政策や制度であることも忘れてはいけないだろう。ICT 活用の高度化、新学習指導要領、令和の日本型学校教育、教員の働き方改革等々、さまざまな改革が行われているが、変化の過渡期にはやむをえず個人の努力や工夫に依存し、一部に過度にしわ寄せが及ぶ状態にも陥りがちだ。教育の土台が学校現場の現状やニーズに合う形で整えられ、少しでも安定した仕組みや枠組みとなることも強く願っている。

笹原小学校学校関係者評価委員会委員　　稲葉友香　小澤利喜男　菊池実香
黒住早紀子　外山悦朗（五十音順）
事務局　　岩佐雅子